

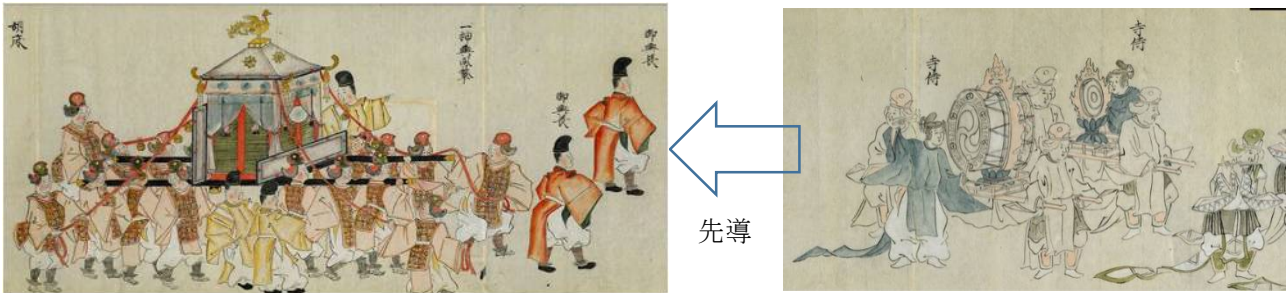
ふとん太鼓の起源と変遷

メモ) 鉄本 2020.11.03

過日、ふとん太鼓に関心を持っておられた来館者に対応したので私の知識整理を兼ねてまとめてみました。

(1) 起源

太鼓台（ふとん太鼓の別称）の起源は中世の荷太鼓にあります。中世の祭礼では、神輿を先導し太鼓を鳴らして祭礼行列の到来を知らせます。東大寺の鎮守神手向山八幡宮に所蔵されている絵巻からその様子を伺えます。下の絵は、宇佐八幡神が宇佐からようごう影向した神迎えの様子を再現した祭礼絵巻の一部です。荷太鼓の後に神輿ほうれん鳳輦が続きます。 【出典】奈良女子大学学術情報センター 転害会図会第2巻より抜粋



大阪の天神祭の催太鼓（もよおしだいこ）、生國魂神社の枕太鼓（報知太鼓）、杭全神社の太鼓台などはいずれも神輿の先導役です。

(2) 進化

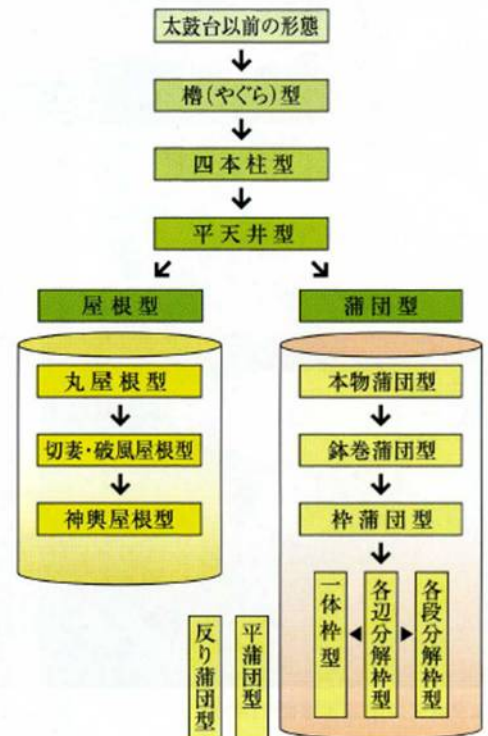
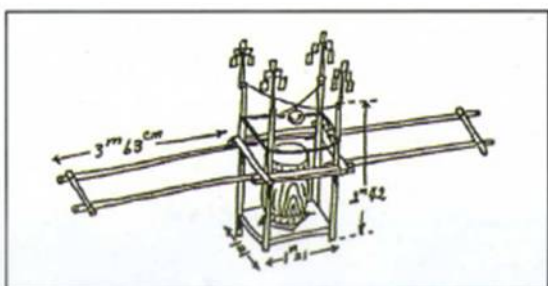
太鼓台は元来神社に1台が基本ですが、寄進された太鼓台が増えるに従って、神輿の先導という役割を離れて、複数台が祭礼に加わり、各組が競い合っ「華美豪華」、「巨大化」する「進化」の道を辿ることになりました。進化の過程で、太鼓台の上に櫓や屋根など色々なものが乗るようになります。

① 櫓型 太鼓を乗せる台を井型に組んだ最も簡素な太鼓台



<吹田市千里山田「太鼓」>

② 四本柱型 四隅に四本柱状の構造物を持つ太鼓台
柱の先端に御幣・梵天・竹笹などを飾り、その内部が神聖域であることを示す。



③ 平天井型 四本柱の上に平らな天井（多くは格天井）を積む太鼓台



宇和島市「四ツ太鼓」宇和津彦神社祭礼絵巻より



御坊市「四ツ太鼓」

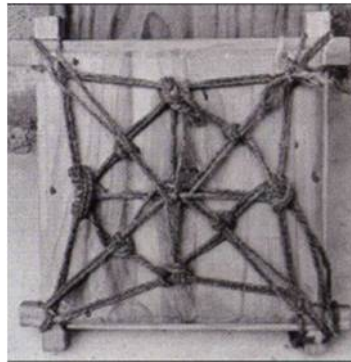
(3) 蒲団の採用

華やかで軽く当時の人々にとって高価な品物である蒲団を取り入れ。これが蒲団太鼓の発展を決定付けた。さらに、「進化」は型式のみならず、「担ぎ方」や「荒ぶれ方」などの所作に向かいます。

① 本物蒲団型 太鼓台に本物の蒲団（四角い座布団）を積む



愛媛県「やぐら」



蒲団の固定にはコツが必要
左の写真は固定法の一例

② 鉢巻蒲団型 外観が蒲団に見えるように、外側を鉢巻状に形を作る。



八幡浜市保内町雨井「四ツ太鼓」



③ 枠蒲団型 構造を簡素化するため、軽量化・細分化できる「枠」を使って蒲団に見立てる。
現在、蒲団型太鼓台は殆どこの形です。

**屋根型太鼓台は平天井型からの発展形。事例の紹介は省略。

(3) 堺における太鼓台の変遷

① 応仁の乱

1467年から10年余りの戦乱により、京から多くの職人工匠が堺に移住してきた。彼らが残した技術が堺製の地車や太鼓山の製作に繋がることになる。

② 元禄元年（1688） 南大小路鉾の製作

開口神社氏子仲の寄進によって南大小路鉾が制作された。正式名称は「神龍刀鉾」、別名は薙刀鉾。この鉾は堺空襲によって焼失したが、市之町の傘店「まんじ」の今井たまさんが南大小路鉾の付属品（「見送り」、「水引」、「胴掛け」など）を保管しており市に寄贈されたので、これをきっかけに昭和55年に博物館が復元し現在館内に展示している。

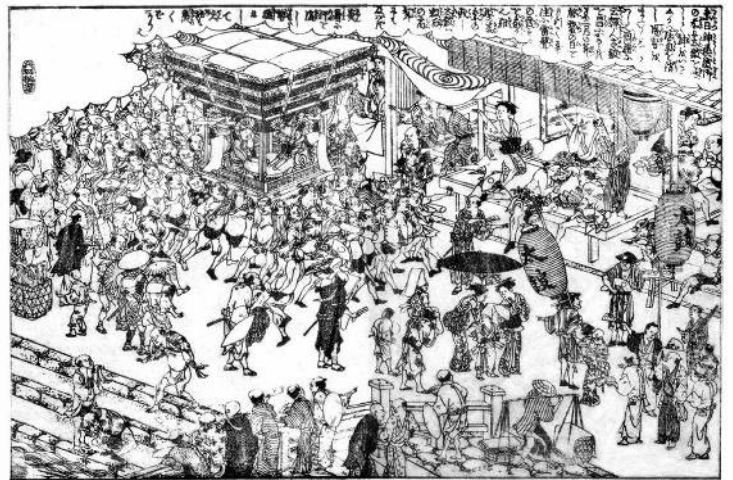
③ 寛保元年（1741）

地車が芦原御旅所に渡御されたという記録（裏付け史料は不明）

④ 寛政年間

「摂津名所図会 4巻」（寛政8年～10年に刊行）に描かれた太鼓台。
挿絵の説明には次のようにある。

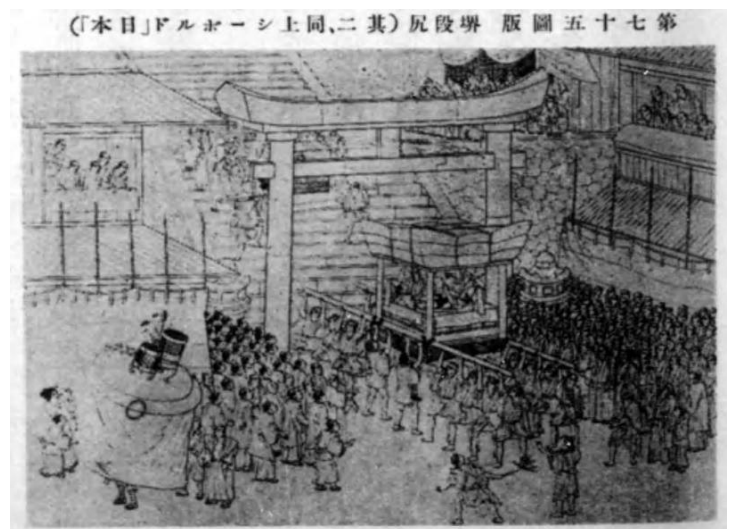
「祭日神輿渡御の前に太鼓を鳴らして神をいさめるは陰気を消し陽勢をまねくならはしなり。（中略）難波の夏祭の囃し太鼓は数百の雷声にも及ばず。（以下略）」



⑤ 寛政11年(1799)

日明貿易以来、長崎と堺の交易が始まり、堺商人の手で堺製の太鼓台が運ばれ、長崎県樺島町の諏訪神社に「コツコデショ」という練物が奉納された。これは堺製太鼓山を少し改良したもので、堺段尻と称された。これが堺のふとん太鼓の前身と言われている。

画像は「堺市史第3巻」より



<コメント>④と⑤の画像を見ると、「本物蒲団型」のように見える。

⑥ 文政4年(1821)

御輿、地車、太鼓山などを大坂城代に上覧

⑦ 天保年間（1830～） 祭礼絵馬に描かれた太鼓台

三村宮（現開口神社）に奉納された祭礼絵馬が「堺市史第3巻」に掲載されており、そこには、御輿、鉦と共に3台の太鼓台が描かれている。（不鮮明ですが赤丸に囲まれた部分）



太鼓台は台座の上に欄干と四本柱、その上に彫物、五色或いは三色の蒲団を積み重ねている。欄干には投頭巾をかぶった太鼓叩きの子供が乗っている。

【参考】投頭巾（なげずきん）とは；四角の袋に縫ったものを後ろの方に折ってかぶる。
近世、踊りに使われ、傀儡師、飴売り、小児などが用いた。（「広辞苑」より）

⑧ 明治29年（1896） 堺の地車事件

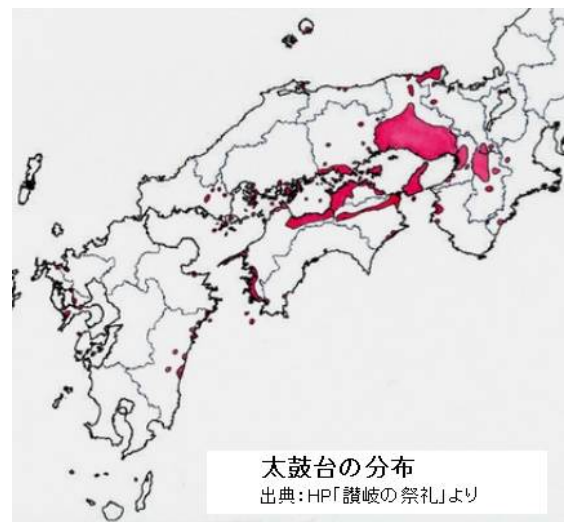
明治29年8月1日住吉大社お祓い祭りの際に、堺市中之町西（現在阪堺線軌道の横道）の大道で湊組の船地車と鍛冶屋町の地車が行き違いの鉢合わせとなった。道幅は狭く互いに道を譲らず争いになった。道路上では大乱闘となり、湊組の2名に死傷者が出る事態となった。
この事件により、警察から祭礼での練物曳行の禁止令が出され、禁止状態は10年間続いた。

⑨ 明治40年（1907） 練物曳行禁止の解除とふとん太鼓の新調

明治39年(1906) 練物曳行の許可が下り、翌年に菅原神社氏子仲（北開、北浜、並松町）と船待神社氏子仲（西湊）が、地車の代わりに堺型太鼓台を新調し奉納した。
その後、開口神社、菅原神社、方違神社、船待神社の氏子仲が次々にふとん太鼓を新調した。

(4) 太鼓台の分布

太鼓台は瀬戸内海を中心とした西日本に分布し東日本には存在しない。
太鼓台の広がり背景には大阪商人の存在がある。
太鼓台は明治中期以降、巨大化し、豪華・華麗なものになった。



太鼓台の分布
出典：HP「讃岐の祭礼」より

(5) 型式

堺市内のふとん太鼓には堺型と淡路型がある。
外見での違いは、堺型は一段のふとん台に対して淡路型は五段のふとん台となっている。
他に大阪型、貝塚型がある。

(6) 用語

祭りの練物には、「担ぐ練物」と「曳く練物」に二分される。

前者の名称には「ふとん太鼓」が当てられるが、地方によって次のような呼び名がある。

「太鼓台」「布団だんじり」「太鼓」「チョーサ」「屋台」「サシマショ」「千歳楽」「ヨイヤセ」

「コッコデショ」「四つ太鼓」「つかいだんじり」「投げだんじり」など。

後者の名称には「段尻」「地車」「壇車」「車楽」「段車」がある。

【参考情報】

① 山車（だし）の語源

「出しもの」の意で、祭りに招き寄せる神の依代（よりしろ）、神座（かみくら）として屋台の中心に突き出した飾りの名前に由来する。古い形のは平安時代の大嘗祭の標山（しめやま）にみられる。

② 山鉾について

鉾とは、屋台の大屋根より上の竿「真木（しんぎ）」と呼ばれる先にあるものを鉾という。

「真木」の裾を包んでいる赤い布は、山の木を象っている。

祇園祭では、「真木」があるものを「鉾」といい、「真木」がなく代わりに「真松（しんまつ）」と呼ばれる松の木を飾ったものを「山」という。

「鉾」は「曳山（ひきやま）」、「山」は「昇山（かきやま）」と呼ばれている。「昇山」は、昔は人が担いでいたが、現在は車輪を付けている。

ふとん太鼓は、祇園祭の「山」から派生したものとされており、「太鼓山」とも呼ばれている。



【参考文献】・「堺まつりふとん太鼓連合保存会30周年記念誌」2003年

- ・「布団太鼓盛衰記」山中啓祐己 1986年
- ・「太鼓台文化の歴史」観音寺太鼓台研究グループ 2013年
- ・「大阪の太鼓台が百倍楽しめる本」木村清弘 2000年
- ・フォーラム堺学 第14集